
導師オッショードの台本

高橋 A 全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

導師オッショードの台本

【Zコード】

Z2001Y

【作者名】

高橋A全

【あらすじ】

少年が迷いこんでしまった世界は、『台本』によつて支配されていた。誰もが自分専用の『台本』を持つていて、その通りに行動することを定められており、『台本』の『設定』から逃れることは許されなかつた。なぜか『台本』を所持していない少年は、状況が何も分からないまま、ふたりの女の子と出会う。『台本』を所持している女の子たちは、少年が『魔王』の部下で、自分たちはその下僕である、と一方的に説明すると、少年と三人での共同生活を始めてしまう。戸惑い、混乱する少年をよそに、『台本』通りに次々と

イベントが発生し、状況はどんどん変わっていく。そしてとうとう、『勇者』役の少年が、敵としてあらわれる。『魔王』の部下と『勇者』、ふたりの少年は生命をかけて対決する事となるのだった。

プロローグ（前書き）

この作品は、立花潮美さんの同名の小説を、許可を得て微修正し、
投稿しているものです。
初投稿で、テストを兼ねています。おかしな部分がありましても
ご容赦ください。

プロローグ

荒野を歩く、三つの人影があった。

一人は小柄な男であり、もう一人は長身の女である。三つ目の人影は、外見こそ人間の女に似ているが、どうやら人間ではないようである。

男が口を開いた。

「見わたすかぎり、岩や石いろばかりだね。どこまで続てるんだろう」

若い声である。むしろ少年と呼んだほうが、ふさわしいかもしれない。

「しばらく続くわ。だが、この先には縁豊かな大地が広がっているはずよ」

そう答えた女の声も若い。女は背が高いので少年より年上に見えるが、実際の年齢は、ほとんど変わらないようである。

そのふたりの腰には、剣があった。どこか重たそうにしている少年に対して、少女はそれを微塵も感じさせない足取りをたもつていた。

おそらく、少女のほうが剣の腕は立つ、と見てまちがいがないのだろう。

「ねえ、本当にこの方向で合ってるのかなあ」

情けない声を出した少年を見て、少女は軽く眉をひそめると、三つ目の存在を見た。

「はい、間違いございません。この先に噂の魔法使いが住んでいるはずです、勇者さま」

どうやら、三つ目の存在は人語を解するようである。

「その呼びかた、やめて欲しいんだけどなあ。ぼく、勇者じゃないし」

少年は情けない声を出したが、少女はそれを無視して存在に話し

かけた。

「その魔法使いは、腕が立つのか？」

「噂ではそういうやういます、お嬢さま。なんでも、あの八部衆に匹敵するとか」

「眉唾物ね」

少女は吐き捨てたが、存在は氣を悪くした様子もない。少年が困った感じで訊いた。

「その魔法使いさん、名前はなんていうの？」

「『フリードリヒ・アレクサンデル・ライゼンブルグ』と聞きおよんであります、勇者さま。なんでも『全てが死に絶える永久氷土の守護神』のふたつ名を持つとか」

「はつはつは。すごいなあ。名前だけで強そうだね」

少年はのんきに笑つたが、少女は顔も声も不機嫌になつた。

「爵位も持たぬ輩が、ふたつ名などと、百年は早い。許せぬな」

「まあまあ、いいじゃない。とにかく、会うだけ会つてみようよ」頭から湯気を出している少女をなだめると、少年は先頭に立つて歩みを進めた。

第一章 IJの世界へようこそ

そして気がついたとき、少年は椅子に座っていたわけで。

あれ？

小首をひねった少年の視界に入ってきたのは、見慣れた教室の風景。

田中、六時間目授業の真っ最中で、教卓の前にいるのは担任の数学教師だ。

何が起きたのかよく理解できない少年に、唐突に声がかけられた。

「おい、一丘。一丘為男」

『ぐく自然に、少年は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしようか先生」

教師が、ちょっと嫌な感じの笑みを浮かべながら訊く。

「問四の答えは？」

少年はあまり数学が得意ではなかつたけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いていたのか。てっきり田を開けたまま寝ていたのか、と思つたよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、少年は赤面して椅子に座つた。そして、

IJはなぜIJK? ぼくはだれ?

と、かなり真剣に自問自答をした。

少年だって莫迦ではないから、IJIはいつも高校の教室で、自

分は『一戸為男』であることは、そりやあ痛いくらいによく分かっているのだ。ただ、ほんのちょっとぴり違和感が頭のどこかをふわふわ漂っていて、それが気になつて仕方がない。

さつきまで、別の場所に居たような気がするし、ずっと、『一戸為男』居たような気もする。

さつきまで、違う名前だつた氣もするし、ずっと、この名前だつた氣もある。

おかしいなあ。

と、少年はうんうん唸つてしばらく考え込んだ。のどに魚の小骨が刺さつていて、そんな嫌な感じが頭の奥深くに存在していて、なんともいえない気持ち悪さを生み出している。そんな少年を見て、隣の席の女子生徒が心配そうな声を出した。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

囁くような小声で問われ、少年も同じような声で応えた。

「大丈夫。何でもないよ、『木村』さん」

そう、その通り。少年の隣にいるのは、まじつかたなき『木村』さんだつた。

先生が言つた通り、ぼくは寝てたのかな。

さしあたつて、少年はそんな結論で落ち着くことにした。

やがて授業終了の鐘が鳴り、教室の中が騒がしくなつた。ぽんやりとした足取りで廊下に出た少年に、一人の男子生徒が声を掛けた。

「一戸、もう帰るのか？」

「ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」

「お前もいい加減に部活に入ればいいのに」

「いいよ。『加藤』みたいに運動神経よくないから」

「そうか、じゃあこれから部活だから。また明日な」

「さよなら」

会話はケチの付けようも無いくらい、よどみ無くかわされた。少

年の記憶が正しければ、『加藤』はサッカー部だつたはずである。

やつぱりぼくは一戸為男だ、まちがい無い。

九十九パーセントの確信を得て大きくなづくと、少年は下駄箱へと足を向けた。

* * * * *

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は学校を出ると、まっすぐ駅に向づ。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は自動改札に定期券を通して、電車に乗る。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は自宅の最寄り駅で降りて、再び改札を抜ける。

「ぼくは『いちのへ ためお』だよな……」

声に出して再確認。少年にとって、それは疑いの余地の無い確固たる現実、のはず。

学校を出てから自宅に至るまでの道筋には、全く不都合が無かつた。ここまで迷うことなく『一戸為男』でいられたのに、駅を降りたところで初めて問題が発生したのだ。

一戸為男は、自分の家の鍵を持つている。そして、財布にそれが入っていることも知っている。家の住所も知っているし、さらには家の外見も知っている。だが、

親のことが思い出せない。

これは結構重大だぞ、と感じた為男はこめかみを軽くもんだ。為男だつてまぎれもない人間であるから、両親がいるはずである。もしかしたら別の場所に住んでいる、とか、既に他界している、という可能性もあるけれども、それならそれで、為男自身がその事実に関する知識を持っていないといけないはず、なのだ。

ところが、その情報が、為男のなかからすっぽりと抜け落ちてしまっている。

学校で感じていたかすかな違和感が、為男の中でむくむくと首をもたげてきた。

なぜ、両親に関する情報だけ持つてないんだろう？

悩みつつ迷いつつも、為男はきれいに舗装された道を歩き、とある一軒家までたどりついた。門の前で立ち止まるとき、家全体を注意深くながめる。

まちがいなく、一戸為男が住んでいる家だ。

為男はしつこいほどに確認した。

この規模の一軒家であれば一人暮らしは有り得ない、という知識この場合は常識といったほうがいいかもしない を持つて

いるがゆえに、為男は慎重に行動した。

仮にも同居人がいれば、失礼の無いように行動しなくてはいけないからだ。

為男は音を立てないようにそっと門を開けると、震える手で財布から鍵を取り出した。それを慎重に鍵穴に差しこみ、時計回りに回転させる。ちいさな金属音とともに開錠されたのを確認すると、為男はまるで泥棒のようにして屋内に体をすべりこませた。

生活感が漂つてるなあ。

それが第一印象。ただ、自分が住んでいる家なのだから、生活感があるのは当然のこと。

たたきの上で低く身をかがめたまま、為男は忙しく眼球を動かした。

目についたのは、靴箱の上有る花瓶と花。それは造花ではないし、しおれてもい。とすると、この生花は誰かが準備した、といつことになる。

自分は花など買つだらうか、と考え、為男は首を左右に振った。
普通に考えるなら準備したのは女だらうな、と結論づける。

おそらく、ぼくは一人暮らしではないだらうけど……。

一番ありがちなのは母親が用意した、というものだけれど、それならそれで母親の知識を為男は持つていいはずである。不思議な違

和感が飽和して、視線を落として考えこんだ為男の視界に、ある物
が飛びこんできた。

靴。

それも一足あり、しかも見覚えがある。

学校指定の革靴。しかも女物だ。

そこまで認識した為男の額から、滝のように汗があふれはじめた。

「一戸為男には、姉や妹がいたどうか？」

「いいえ、居ません。

「一戸為男には、近所に住んでいる親戚の女の子がいたどうか？」

「いいえ、居ません。

「一戸為男には、家に呼べるよつな彼女、もしくは友達である女子
生徒がいたどうか？」

「いいえ、居ません。

いいえ、いいえ、いいえ。そんな情報は持っていません。

結論。

警告！ 有り得ない状況です！ ここは一戸為男の家ではない可
能性があります！

為男の耳に、ブツブツ、という嫌な効果音が鳴り響く。直後にお
どろおどろしい極彩色で脳内に描かれたのは、『不法侵入』の四文
字。

家に入る前に呼び鈴を鳴らしておけばよかつたのかもしれないが、
今となつてはアフターフェスティバル、つまり後の祭り。仮にも、
同じ学校に通う女子生徒の家に勝手に鍵を開けて音も無く入つた、
となれば、それはもう一大事、としか言いようがない。

見つかる前に、逃げないといけないじゃないか！

と、為男は世界を救うべく立ち上がった勇者のよつに強く決意し
たが、

残念なことに遅かつた。

何かを感じて顔を上げた為男の視界に飛びこんできたのは、一人の髪の長い女の子。

ブラウスに付いているリボンの色から一年生であるとわかり、為男の冷汗の量は急激に増大した。同学年の知っている生徒ならまだ言いわけのしようもあるけれど、下級生となるとどうにもならないからだ。しかも、相手は見るからに結構性格のキツそうなキレイ系の女の子で、生半可な言いわけなど微塵も通用しそうに無い。

為男の動搖をよそに、その下級生の女の子は黙つてこちらに近づいてきた。

更にまずいことにもう一人、少し幼さの残るかわいい感じの別の女の子が現われ、短い髪を揺らしながら小走りにこちらに向かってくる。

逃げ出そうとして足の動かない為男の前にやつてきた一人は、為男が何か言う前に、

その場にひざました。

「お帰りなさいませ、『一』主人さま」

「『一』主人」、お帰りなさいです」

それぞれ聲音のちがう少女たちの台詞を聞きながら、為男はその場に立つているのが精一杯だった。

為男が、まるでさらし粉で漂白されたように脳内が真っ白になりつつも、

「ええと、うん、あれだ。……ただいま！」

と、ほがらかに言つたのは、さしあたつてその場を取り繕おう、というせこい考え方から。ところがどつこい、髪の短い方の女の子が、「にへへ」

と、笑つて為男の学生鞄を取り上げるようにして持ち、もう一人の髪の長い女の子が、

「どうぞ」

と、うやうやしくスリッパを出してくれたので、為男は仕方なしにそれを履いてずかずかと家の中に上がりこんでしまった。

まるで勝手知ったるいつもの我が家、のよつた感じで大きな部屋までたどりついてしまった為男は、

ああ、ここは居間かな、それともダイニングと呼んだほうがいいのかな。

などと、どうでもよいことを考えて誤魔化していたが、それでも女の子に示されるままに角型の大きなテーブルに座りこみ、一人の女の子が相対するように座りこんでしまった後では、黙つているわけにもいかなくなつた。

為男は諦めて現実と向きあつと、少し考えてから訊いた。

「……それで？」

一人の女の子は、顔をちょっと見あわせてから応じた。

「『それで？』というのは？」

「二人は、ぼくのことを知つてるの？」

「そりやあ当然でしょ。『ご主人さま』だから」

と、なに言つてるのこのひと？　みたいな感じで髪の長い女の子に言い返されたので、為男はかなりバツの悪そうな顔をしながら、「いや、でもぼくはふたりのこと知らないんだけど」と、真剣に言つた後で、小さくため息をついた。一人の女の子は再び顔を見あわせて、

「ねえ落子、こうじゅう『設定』だつたつけ？」

「ええと、わたしがよく覚えてませんんですけど」

「どうすんの？」

「と、とりあえず……自己紹介でもしておきますですか？」

などと、為男には意味不明な会話をしている。

それでもひそひそ話のあげくにふたりの意見が決まつたらしくて、髪の長い方の女の子が、

「あたしは色部冷子、見ての通り高校一年生よ、『ご主人さま』

と、あでやかに言いつつ、とても一年生とは思えない魅力的な足

を組みかえ、おとな顔負けの大きな胸をそらしてみせると、もう一人の髪の短い女の子は大きく拳手してから、

「わたしは逆井落子です！ 同じく一年生です、『ご主人！』

と、まるで選手宣誓をする運動会の小学生みたいに、元気よく言つてのけた。

「……はあ」

と、為男がため息混じりにそうつぶやいたのも当然のこと。

これつて自己紹介になつてないんじゃないのかな、とか、いやいや、名前が分かつただけでもマシなのかな、とか内心でぼやき、手紙で『放課後、校舎裏で待つてます』と呼び出されたのに結局誰も来なかつた、みたいな切ない気持ちになりながらも、為男は覚悟を決めて大事なことを訊いた。

「で、二人はぼくの何なの？」

それに対する答えは一人同時で、一片の迷いも感じられない口調。

「『下僕』です」

かくしてこの家で都合三度目となるため息をついた時、為男は決意した。

もうこうなつた以上、全部正直に言つしかない、と。

「ぶつちやけて言つてしまふと、ぼくは状況が全然分からんんだ」と、為男はまるで全面降伏した全滅寸前の部隊の指揮官のような口調で言つと、

「ぼくは何なんだろう」

と、自分でもかなり曖昧だな、と思われる質問をした。

これで『だからご主人さまです』などと返すのだけは許して欲しいなあ、などと為男が祈つたのも僅か数瞬のことで、二人は再び同時に答えた。

「『魔王』の最強の部下で、『四天王』の筆頭です」

しばし、沈黙。

虚を突かれた為男はあんぐりと口を開けたまま、冷子は形のよい眉を軽くひそめたまま、落子はにへへと笑つたまま、てくてくと時間が流れていった後で、

「まあう、つていうのは、『魔』の『王』なの?」と、為男は訊いた。

色部冷子がえらそうにうなずく。「そうよ」

「じゃ、ぼくは悪者の部下なの?」と、為男は顔をしかめた。
逆井落子が「くくくとうなづく。「ですです」

「つまり、ぼくも悪い人?」と、為男の顔がさらにけわしくなる。返ってきたのは、二人並んでの春風のように爽やかな笑み。「はい、ものすごく!」

そして再び、沈黙。

沈黙を破るべく口火を切つたのは冷子で、

「ねえ、やつぱりおかしいよ。『設定』とちがうじやん」と、断定すると時計を見て「もうこの時間なら日は落ちてるわね」と、独語しつつ、為男に向かつて「その鏡を御覧になつてください」と、名前の通り冷たく言い放つた。

思考が停止したままの為男は、言われるがまま、自分の左にある大きな鏡を見た。

そこに映つたのは異形の存在。

牙。爪。蝙蝠のような翼。盛り上がつた筋肉。

「夜は鏡の中に真の姿が現われるの。一応、人らしい形はしますでしょ?」

と、色部冷子がくふふつ、と笑つた。

逆井落子はちょっと困ったような、嬉しいような、不思議な顔で

為男を見ていた。

第一章　みんなのやくわく——（一）

そして、一戸為男は驚いた。

何が驚いたって、鏡に映つた自分が化け物の姿をしているのに『ああ、そういうものなのか』と、なんとなく納得して思わずうなづきかけてしまつたからだ。それでも、

もしかしたら鏡に細工があるんじゃないか？

と、疑いつつ、腕を上げたり下げたり首を左右に振つてみたり、鏡の中の化け物が左右が逆ただけで、自分と全く同じ行動を取ることに流石にちょっと腹を立てはじめたとき、色部冷子がとなりでにへへ、と笑つている逆井落子を誘つて、為男の後ろに回りこんだ。それはつまり為男ともども鏡に映るつゝ、という作戦で、鏡の中の化け物の数が三匹に増えた時、為男は無条件降伏を受諾した。

「……どうやら、本当にそうらしいね」

と、うなだれた為男を見て、冷子は鏡に映つている黒い羽¹と背筋をそらすと、

「『主人さま、『台本』読んでいらっしゃらないでしょ？』

と、あきれた口調で言つた。それに対しても為男は、

「『台本』って、何なの？」

と、訊くは一時の恥、訊かぬは一生の恥、とばかりに、悟りを開いた高僧のような口調で言い返したが、そこで返ってきた反応は為男の想定の外にあつた。

「嘘！　『台本』のことすら御存じ無いの？」

「ああ、わたしよりもさらに上の人がいるなんて……」

鏡に映る尖つた尻尾を嬉しそうに左右に振りつつ、まさに春爛漫、といった感じの落子のハートを、斜め左後ろから体¹とふつ飛ばしながら、寒風を身にまとう冷子が言つた。

「あなたは台本讀んでない、っていうか讀んでも忘れてるだけだし

よ

「ああっー、冷ちゃんひどい！」

「ふるふる、と田を潤ませた落子を無視して、ぶるぶる、と胸を振るわせた冷子は、

「悪いんだけど、はつきりさせたいの。」主人さま、「冗談をおつしやつてるの？ それとも、本当のことをお話されているのかしら？」と、生活指導の女教師のような口調で問い合わせてきた。

ああ、キレイな子に敬語で怒られるのも、そんなに悪くないなあ。

などと、為男は少々的外れなことを考えつつ、

「知らない。知らないんだ。だから、分かるように話して欲しいなあ」と、懇願するような田つきで申し開きをした。

一人の女の子は驚いたような戸惑ったような顔を見合させた後で、「のですね、あたしたちは下僕なんですから」と、冷子が細い眉をひそめた。

「らしいね」

「」主人の命令には絶対に従います」と、落子が丸い目で見つめた。

「なるほど」

「あたしたちにお願いするのとか、やめていただけませんでしょうか？」と、再び冷子。

「はあ？」

ここで色部冷子は敬語を使つことを諦めたらしい。

「だから下僕なのよ。わかる？ お願いしないで、命令して欲しいんだけど。こっちがやりづらいのよね」

「そう、なんだ」

為男はうんうんうなつて腕組みをすると、じばし黙考した。

「」やうやうの世界には『日本』なるものがあつて、ものすごく大切なものがいる。だけど、それについてぼくは知識を持つていないので、どうしたらいいんだろう？

なんとかして二人の女の子から聞き出す術はないのだろうか？そこで何かが流星の如くきらめいて、為男は二人の目を交互に見ながら訊いた。

「ぼくの命令は、絶対？」

「はい、絶対です」

と、二人が同時に答えたのを聞くと、為雄は座りなおしてから命令した。

「なら、『台本』を見せてくれ……いや、見せろ！」

こんな感じでいいのかな、と手探り状態の為男に、冷子の厳しいカウンターが一閃。

「それは、できないわね」

「は？ 何で？ いま『絶対』って言つたじゃないか」

僅か三秒で前言を撤回され、温和な為男も少々非難がましい口調になつたが、

「自分の『台本』を他人に見せるのは、『禁忌（タブー）』だから」と、冷子に返されてしまった。

これはまた随分と、小難しい単語が出てきたもんだなあ。と、為男は呆然としつつも、これではならじ、と再度命令した。「ええと……じゃあ、あれだ。『台本』に関する『禁忌』について、説明……しろ？」

冷子は即答を避けようと、隣のショートカットの同級生を見つめた。

「これは、セーフよね？」

「むうー。……まあ、『禁忌』はみんな知ってるはずですからあー」為男は期待と不安の入り混じった目でふたりの女の子を見つめていたが、無言の相談の後、落子の方が口を開いた。

「『台本』は一人に一冊与えられていますが、それぞれの『台本』はその人専用の特製で、一冊一冊内容がちがうです。なので、他人が読むといわゆるネタバレになつてしまつますので、『絶対に他人が見てはいけないです』という厳しい決まりがありますですね。その『禁忌』を破ると、それはもうどかーんと、ビックリドッキリ

できやいーんな、凄くドでかい大不幸が訪れるです、つてことになります

「……はあ」

長い説明の割にはよく分からなかつたが、為男は落子の言葉の内容よりも、その真剣な表情を見て自分を納得させることにした。そんな主人の反応を見て、えつへん、と満足そうにしている落子に、為男は続きをうながした。

「で、他には？」

「ふえ？ 他には何もないですよ」

のほほんと答えてみせた落子を見て、為男はあきれながらも、「いや、無いわけ無いよ。捨てるなとか汚すなどはあるだらうし、あとは『台本』で決められたルールを破るな、みたいなのもあるんじゃないの？」と、食い下がつてみたが、

「そんなこと、できつこないから大丈夫です」と、笑顔で返されてしまった。

それはおかしいよ、と全身で表現している為男を見て、冷子が強く厳しい声を出した。

「大事なアイテムは、捨てたり壊したりできないでしょ？ それにルールは破れるようには造られていないのよ。だから、禁じる必要すらないの？ わかる？」

冷子の断定的な口調を聞いた為男は反論をあきらめた。実際に『台本』を所持して、『台本』の知識も持っている一人がこう言つている以上、本当のことと思えるから、ここで為男が抗議してもどうにもならないのだろう。

野球の審判に向かつて、『どつしてストライク三つでアウトなんだ！ ストライク四つでもいいじゃないか！』と、抗議したってどうにかなるものではない。つまりはそういうことだ。

そこで、為男は無駄な抵抗をやめて、具体的な話をすることにした。

「じゃあ、『台本』そのもの、について訊きたいんだけど」

主人の命令を受けた冷子は、ダブルエスプレッソを飲み干したような苦い声で応えた。

「初めてに言つておくけど、答えられないことがほとんどになるわよ？『台本』を他人が読むな、つていう『禁忌』があるんだから、自分の『台本』を他人に読み聞かせるのもだめだ、つていうのくらいは分かるわよね？」

「ちょっとくらい、ダメなのかなあ」

「あのね、『ご主人さまのために言つていいのよ？』ここであたしがペラペラ『台本』読み聞かせたらどうなると思うの？『ご主人さまがあたしの『台本』を読んだ、つてみなされてしまうのよ？』そしたらドでかい大不幸が訪れるのは『ご主人さまに対してなんだからね。それに、自分の未来の行動を他人に知られるなんて、恥ずかしいじゃない！』

全くもって、『ごもっともな指摘だ。思わず納得しました』為男は、とにかく当たりさわりの無いことを訊いてみることにした。

「まあ『台本』っていうからには、台詞とかが書いてあるわけだよね？もしかして、今、二人が話している台詞も『台本』に書いてあるの？」

「いま、こうして話していることは『台本』に書いてないわね。でも、キャラの『設定』に『冷子は下僕として主人の命令に絶対従うこと』と、書かれているの」

「それで、ぼくの質問に答えてくれている、と」

「そういうことね」

満足そうに冷子が大きく頷いたが、為男にしてみれば訊きたいことは山ほどある。

「で、誰が書いたの？』この台本』

「知らないわ」

「二人の持つてる台本は、同じ人が書いたの？」

「おそらくは、ね。共同執筆、という可能性もあるから断言はできないけど」

「で、誰の為に書かれてるの？この台本」

冷淡に質問に答えていた冷子が、初めて返答に窮した。

「……どうじう、意味なのかしら？」

「つまり、ぼくたちはその『台本』通りに、まあ、ある意味、劇を演じているわけだよね」

思わず、と言った感じで、冷子は右手のひらを自らの頬にぴたりと当てた。

「そ、そういう見方もできると思つけど……」

「誰が見てるの？ 誰に見せてるの？ 何の為に？」

と、為男は矢継ぎ早に質問の矢を繰り出したが、

「それは、ちょっと……分からぬわ」

と、冷子が初めて困惑の色を見せたので、為男も、どうやら本当に知らないみたいだなあ。

との、結論を得た。

戸惑いを隠せない冷子に、為男はたたみかけるように連續攻撃。

「じゃあ、僕が『台本』を持つてないのはなぜ？」

「それは、何かのミスとか手違いとか……」

「他にも持つていない人、知ってる？」

ここで冷子は大きな胸の下で腕を組んで少し考えた後で、

「『雑魚』は持つてないみたいね」と、答えた。

「『雑魚』？」と、眉を軽くひそめた為男に、

『『雑魚キャラ』の人間のことよ。いてもいなくともどうでもいい人たち。あ、勿論、犬とか猫とかも台本は持つてないわね』と、冷子が乾いた声で説明する。

今度は為男の方が困惑した。右手で顔をぬぐつたのは、意識しての動作ではない。『雑魚』といつ言いかたよりも、冷子が『雑魚キャラ』という、人間と犬猫とを、まるで同じレベルのものとして扱うような、あつさりとした口調で言つたことが気にさわったのだ。

「あの、ご主人。ご気分でも悪いですか？」

空氣をかき回すようにして落子に手を振つてみせると、為男は話

題を変えた。

第一章 みんなのやくわく——（2）

「ぼくが台本を持つていなし、ところに」とに關して、相手は
どう思つてゐるの？」

為男は逆井落子の丸い目をのぞきこむよつとして訊いたが、
「あ、できれば名前で呼んで欲しいです」
と、落子はまるで子犬のような瞳をきらきらさせたお願いして
た。

為男は、つい十五分ほど前の記憶を脳内で反芻。
「ええと、色部さん逆井さん、でいいんだつけ?
『きやいーん！』下の名前で呼んで欲しいです」

子犬ちゃんは『不満の様子である。仕方無く、為男は慎重にそれ
ぞれの名前を呼んだ。

「……れいこさん、おちいさん？」

「『れん』とか、要らないから」

冷子は、名前以上に冷たい視線で言った。

「でも、それはちょっとなあ」

「あたしたち、下僕つていう『設定』なのよ。『さん』とか付け
られると、やりにくくて仕方無いのよね。無い方がいいんだけど」
と、眼光するどい冷子に、

『設定』の問題じゃなくて、ポリシーの問題だ。

と、為男は渋面を浮かべた。

初対面の女の子、それが幾ら後輩だといつても、下の名前で呼ぶ、
つていうのはちょっと恥ずかしい。ましてや呼び捨て、つていうの
は、なんか妙に馴れ馴れしい限りで為男は困り果てた。

それでも下僕一人に真剣な目で懇願され、為男は仕方なしに承諾
した。でもまあ、慣れないことには変わりなく、ものの見事に言い
終える前に噛んでしまった。

「れいこ、れい、どじー？」

「それでいいわ」

と、冷子はにっこり笑つて即答。一秒ほど遅れて落子は拳手して抗議の声。

「すとーっぷ！ すとーっぷ！ よくないですよくないです」

冷子は同僚の異議申し立てを意に介した様子もなく、さうりと言つてのけた。

「でも、やつぱりおかしいわね」

「何が？」

「ご主人さまが『台本』知らない、つてこいつ」とよ

「なぜ？」

「知らないんなら、自分の名前も知らないはずなんだけど」

あ。言られてみれば。

「いじつて、結構特殊な『設定』なのよね。地球といつ惑星の、日本という国の、東京といつ首都の近郊、そしてそこにある高等学校の普通科だし」

冷子は下僕とは思えない、容赦の無い視線と口調で主人を追い詰めつづあつた。

「それに、この家までたどりつけないと思つわ。定期券を持つてゐから、降りるべき駅は分かつても、家の住所は知らないはずでしょ？」

「住所が学生証に書いてある可能性は？」

色部冷子は、思わず為男が目を見張つたほどの、高校一年生とは思えない妖艶な笑みを浮かべた。

「ご主人さま、学生証なんて持つてるんだ」

掌の上で転がされるような感を覚えつつ、為男は財布と定期入れを探つた。

「……無い、みたいだね」

「でしょうね。学生証を使うシーンが無いから、そんな小道具は用意されていないのよ」

「小道具、ねえ」

じゃあ、この日の前の机は道具なのか？

と、為男は思った。それにこの家は？ 街は？ 駅は？ 電車は

? そして学校は？

為男はえいえい、と氣合を入れた。ちょっとでも氣を抜くと、注意がすぐに明後日の方向に飛んでしまう。まずは『台本』のこととはつきりさせなくてはいけない。

「他人の『台本』を読むのは『禁忌』なんだよね？」

主人の質問を受けて、当然です、とばかりに同時にうなずく冷子と落子。

「外見を見るのも駄目なの？」

それはどうでしょうね、と今度は同時に小首をかしげてみせるふたりの下僕。

「台本の外面だけでいいから、見せて欲しいんだけど？」

いい加減にして、と冷子だけが顔をしかめた。

「自分の立場をわきまえて欲しいんだけど。あたしたちに頼むのやめてよね」

「……『台本』の外見だけ見せるんだ、冷子。命令だぞ？」

「つまり、中身を読まないけど存在を確かめたい、という意味にとればよろしいでしょうか、ご主人さま」

「そうだよ。もしかして外見を見れば、ぼくも『台本』について何かを思い出すかもしれないだろ？」

「それなら、『禁忌』に引っ掛からないかな……」

小声でつぶやきつつ、冷子は自分の鞄に手を伸ばした。

「はい、これ。触っちゃ駄目よ、ご主人さま」

冷子が為男の目の前に差し出してみせたもの。

予想外にも、その大きさは文庫本程度しかない。そして

「白い本だね。表紙も裏表紙も背表紙も真っ白だ。せめて、題名か持ち主の名前くらいは書いてあるか、と思つたけど」

実物を見ても、為男は何も思い出すことができなかつた。それで
も念の為に訊く。

「ドジ子のは？」

「……あの、ご主人。本当にその名前ですか？」

「まざい？」

「『』主人さまに名前を付けていただくなんて、下僕として誉れなことだ、と思うわ」

冷子の意地悪な視線を受けて、落子は目をつぶるひもさせた。

「つづつ……それでいいです」

「見せてくれ、ドジ子」

と、わざわざ為男が名前を呼んだのは、そう呼ばれたときの、逆井落子の困ったような、怒ったような、そしてどこかちょっとびり嬉しそうな顔が少々気に入ってしまったからだ。

落子は為男の期待通りの表情を浮かべつつ、制服のポケットの中を探ると差し出した。

「はい、これです。ご主人」

ドジ子の台本も、同じように白い本。大きさも文庫本程度。だが、ただ一箇所だけ、冷子のものと異なる点があった。見間違えようの無い、それは明らかに違う。

この時、為男もその相違点に気付いていたのだが、むしろその小ささの方が気になつたので、軽やかに流してしまった。

「この程度の小ささで、『設定』やら『台詞』やら、全部書いてあるの？」

主人の『』下間に、下僕の二人が大きくうなづいてみせる。

「とすると、結構小さな字で、びつしりと？」

「そこは『』想像にお任せするわね」

それ以上は言いたくない、というわけか。

とりあえず、為男はあきらめとともに納得した。

「ぼぐが思い出せることは、何もないなあ」

「あら、そう。困ったわね」

冷子はそう言って主人たる為男を見つめたが、困っているのは為男のほうである。

「仕方がないわね。『台本』無しでやつていぐ、しかないんじゃないかしら」

「でも、ぼく自身がどう振舞えばいいのか、も分からるのはなあ
「それはあたしたちに訊かれても困るわ。あたしの台本には、基本
的にはあたしのことしか書かれていないから」

為男は腕を組むと、椅子ごと後ろに仰け反つてうんうんうなつた。
しばし考慮の後、

「せめて、ふたりはどういうキャラなのか教えてもらえないか？」
と、提案。

「それって、自分の台本を読み聞かせると同じことじゃないのよ」と、拒否。

「じゃ、こうしよう。『一人が下僕として自分の立場をわきまえて
いるかどうか』を確かめたい。一人とも、確認の為に自分の立場を
説明してみせる。これならどう？」と、妥協案。

冷子の口元が、かすかに緩んだ。

「へえ、意外と頭の回転は悪くないんだ」「命令だぞ。冷子からだ」

意地になつている為男を見た色部冷子は、くふふつ、と笑うと、
「あたしは一戸為男という仮の名を持つご主人さま、すなわち魔王
四天王の筆頭、その下僕の色部冷子です。得意なのは攻撃魔法」と、
大きな胸を突き出し気味に言つた。

「へえ、魔法とか使えるんだ」

と、為男が楽しそうに笑つていられたのもこゝまでだった。

「ええ。そしてあたしはご主人さまの愛人で、毎晩お情けをちょう
だいしています」

「……は？」

引きつる笑顔で為男は裏返つた声を出した。

「『お情け』っていうのは、その……つまり……」

「それがあたしの努めですわ、ご・主・人・さ・ま」

と、艶っぽくウインクした冷子を見て、一戸為男は両手で丁の形

を作つて大声を出した。

「ストップ！ タンマ、ちょっとタンマ。これは、これだけは確認しておきたい。これは、その、大人向けのお居なのか？」

「つまり？」

「その、アダルトな、いわゆる十八歳未満禁止の話なの？」

「そんなの、聞いてないわよ」

「で、でも、それらしいこと言つたじやないか」

「『お情け』の話？」

「そう。 そうそう、それ！」

「あのね、この世界の舞台は二十一世紀初頭の日本なの。この時代の高校生だったら、それくらいバンバンするのが当たり前でしょ？」

その返答を聞いた為男は、まるで神父に助けを求める子羊のようにな目でもうひとりの下僕を見つめたが、落子は顔を赤らめてうつむくだけだった。そんな相方を冷子は容赦なくうながす。

「次、ドジ子の番よ」

為男に見つめられた逆井落子はモジモジしながら、

「あのう……わたしは一戸為男という仮の名を持つご主人、すなわち魔王四天王の筆頭の下僕、逆井落子です。得意なのは防御魔法です」と、小さな胸を抱え氣味に言つた。

為男は不安そうに作り笑いを浮かべていたが、落子はそれ以上何も言わない。しんぼう堪らん、そんな感じで為男は訊いた。

「で、ドジ子も、そ、そ、その、その、そのなの？」

落子は驚くほど速さで手を小刻みに左右に振つてみせた。

「いえ、わたしはまだ、ご主人の『リュウウェイ』をいただいておりませんです、はい」

それを聞いた冷子が、いよいよもつて冷たく言い放つ。

「ちょっと、ウかんむり付いてるんじゃないの？ それは『チョウアイ』って読むのよ」

そして、一同しばし沈黙。

ああ、台本には『寵愛』って書いてあったのか。

と、事態を察知した為男は大きく頷くと、

「やっぱり、ドジ子でいいのかな」と、確認した。

「異議は無いわ」と、色部冷子は頷き、

「しぶしぶ」と、逆井落子は泣いている。

悲嘆にくれる同僚から主人に視線を移すと、冷子がけだるそうに言つた。

「で、するんでしょ？」

「な、何を？」

「そういうこと、女のあたしから言わせないでよ」

そう口を尖らせると、冷子は綺麗なウェーブのかかつた茶色い髪をかき上げた。短めのブラウスの裾から見える素肌が、真珠のよう白く輝いて為男の目に焼きつく。

「寝室は一階にあるから」と、冷子は席を蹴つて立ち上ると、「最初くらいムードを大切にしてよね」と、呟くと振り返り「早くこっちに来てよ」と、不満そうな表情を浮かべて主人を見た。防戦一方の為男もいよいよ我慢できなくて、

「ちょっと待つてくれ！頼むから、『当たり前』みたいな言い方を止めてくれよ！ぼくはこの家に入つてから知つたことばかりで、すごく混乱してるんだ！」

と、大声で怒鳴った。冷子を見るため、とくにうつむき、自分自身の戸惑いのために。

その結果、一戸為男の当惑は更に増強されてしまった。

「も……申し訳ありませんでした、ご主人さま」

と、震える声で色部冷子がその場にひざまずいたのだ。しかも震えているのは声だけではない。ふと気付くと、逆井落子も椅子から転がり落ちるようにしてその場に土下座している。こちも体を震えさせ、わずかに見える顔は冷子同様に真っ青だった。

第一章 みんなのやくわく——（三）

「お、おー。ふたりともじうしたんだよ」

冷子は答えない。

恐る恐る、といった体で落子が神妙に申し立てた。

「あ、あのですね、ご主人は怒ると体から『鬪氣』が出るです、はい……」

「『鬪氣』？ オーラみたいなものか？」

「は、はい。ですです。『ご主人はわたしたちより圧倒的に『レベル』が高くて強いですでの、『ご主人の怒りの『鬪氣』を浴びると、その、下僕のわたしたちは……』」

落子の声が掠れ始めたので、慌てて為男は深呼吸を繰り返した。
「違うんだ、怒ってない、怒ってないぞお、うんうん。……とりあえず、冷子、立てよ」

さっきまでの強気はどこへやら、ゆらゆらと立ち上がり立った色部冷子は幽鬼のようである。知らなかつたこととはこえ、為男はこささかならず罪悪感を覚えた。

「何といつか、あれだ。冷子、ちょっと自分の部屋行つて、休んでこい」

「でも……」

と、紫色の唇が痙攣するよつと動くのをみて、為男は強く、優しく命じた。

「命令だから、休んでこい、冷子」

小さくうなずいた冷子がふらふらと居間を出て行くのを見届けると、為男は振り返った。

「ドジ子、お前も休むか？」

「あ、わたしの方は大丈夫ですけどです」と、落子は上田遣いで為男の顔色をうかがっている。

「そうか。大丈夫なら椅子に座つてくれ。もう少し訊きたいことが

あるんだ」

為男が笑ったのを見て、落子はぴょいんと飛び上がるよつこして立つと、スカートがしわにならなによつに注意深くいそいそと椅子に座りこんで、にへへ、と笑つた。

「訊きたいのは『設定』のことだけ……あ、そうだ、その前に。何も考えずに言つちやつたけど、二人とも自分の部屋はあるんでしょ？」

「ありますです。一人に一部屋を使わせていただいてますです」と、どこか申しわけなさそつに言つた落子を見て、為男は笑顔で応えた。

「大きな家だから、自由に使えばいいよ……じゃなくて、使う」とを許可する

「はいです！ キヤツホウ！」

「ははは、と笑つた落子を見て、色々な意味で安心した為男は咳ばらいをひとつ。

「その、さつきの話の続きになるけど」と、ここでは為男は自分の口調が怖くならないように注意しつつ訊いた。「必ず、『設定』の通りになるのか？」

「今、『台本』に無い台詞をお話ししているよつて、そこそこ自由が利きますです」

「じゃあ、自由が利かない場合もあるの？」

「ありますです。それは、強制イベントですです」

「強制イベントお？」

「その、ストーリーの根幹にかかる大事なイベントです。それについては、自由はほぼ利きませんです」

「ま、『台本』通りに進めるためにはそういうものも必要か。為男は軽く納得しかけたが、慌てて頭を振つた。

簡単に『強制』だというが、それは自分の言動や行動の一切合切を支配される、ということではないのだろうか。それはちょっと怖すぎる。為男は落子の目を見て、

「強制と並べるのは、どの程度の強制なの?」と、真剣な声を出したが、

「基本的には、体が勝手に動きますです」と、あっけらかんとした答えが返された。

「体が勝手に、ついて……じゃあ、台詞も?」

「はいですか」

為男は無意識の中に陥しこものを顔に出しちしまで、顔色をつかがっていた落子が子犬のように首をすくめた。為男はそれに気が付かないで、

「強制ではないイベントもあるの?」

と、探るような声を出した。落子は三回続けて瞬きをした後で、縮めていた首を伸ばしてから、ちよこんと傾げると感じた。

「ふえ? おっしゃっている意味がよく分かりませんですが、まあ、何といつか……強制じゃなくイベントは、全部自由なイベントに当たると思いますです」

「自由……ね」と、呟いた為男は乾いた唇を舐めつづけた。「いや、あの『自由』っていうのは、ぼくはどちらに利くもんなんの?」

「いま、『主人が自由に振舞えている程度に』ですです」

それはひどく曖昧な言い方であつただろつけれども、為男はなんとなく理解できた。

「なるほど。じゃあたとえば、この家の中ではある程度自由が利くのかな?」

「はいですです。ここでは起じりな……な、な、な、夏の海ははらはら~」

この時、驚くほど的に為男は落子の言いたいことを察知した。

「つまり、家の中で起じる強制イベントは無い、と」

「つりつ~ るるる~」

一生懸命に誤魔化してくるのを見ると、『家の中で強制イベントは起じらない』ところが、台本に書いてあることなので口にする

のは『禁忌』らしい。

「で、冷子のことだけど」

「れれれ」　冷ちゃんが、どうかしました、ですか、ろろろ～～

「もう歌わなくて、いいから」為男は手を振つて落子の即興歌を止めさせると、迷つた挙句に正面切つて訊いた。「その、設定の通りに、あ……愛人関係にならないと駄目なのか？」

落子はもともと丸い目を、さらに丸くしてみせた。

「ご主人、冷ちゃんのこと嫌いですか？　冷ちゃん、バインバインです。ボツ・キュツ・ボーン、です。ブルルンブルルンです」

「それはそうだけどさあ」

と、半笑いで答えてしまつた為男は、脳内にむくむくと湧き上がつてきた冷子のボディラインを必死に追いはらいつつ言った。

「でも、会つたばかりじゃないか。それにそういう目的だけで、その、そういう関係になるのは、あれだと思つ」

直後に為男が顔をしかめたのは、自分でも何を言つているのかわからない発言をしてしまつた、という自覚があつたせいだったけれども、落子の方は妙に納得したらしい。

「ご主人、意外と純情です。ビックリです」

にへへ、と落子が笑つたので、為男もそれに応えて、にへへと笑つた。

ふたりで笑うと、何か妙に落ち着いてしまつた。

ま～つたな、訊きたいことは山ほどあるんだけどな。

とにかく、気になることから訊いておこう、と為男は決めた。

「とりあえず。なんで、ぼくのこと『ご主人』って呼ぶの？」と、素直に訊くと、

「ご主人だからです」と、会つた直後を思い出させるような答えを落子は返してきた。

為男としてはそれでは納得いかない部分が多くあったので、しつこく訊いた。

「それってほりさ、普通は知り合いの奥さんの旦那さんのことをそう呼ぶわけでしょう？『ねえねえ、お宅のご主人、で見かけたわよ』みたいな？」

「ですね」

「なら、冷子みたいに『主人さま』でいいじゃないか」

「かぶるから、らしいです」

「……は？」

「冷ちゃん呼びかたが同じだと、どっちが喋つてるか分からなかから、主人に対する呼びかたをふたりで別にする、ってです」

「ぼくは十二分に区別付いてるけど、それは誰に対してなの？」

「さあ、誰でしょー、です」

しばし、むうー、と落子はうなつて考え込んでいたが、急にぴよこん、と立ち上がった。

「あ、わたし冷ちゃんの様子見てきますです」

どうも考え方むのは苦手らしいな、と察知した為男は鷹揚にうなづいてみせた。

「……そうしてくれ

落子が小走りに居間のドアに駆け寄り、まさにノブに手を伸ばした瞬間、

「きやいん！」と、急にあいたドアに激突した。

「あ、居たの？」と、おでこを押さえてうずくまつた落子を横目で見て、冷子が言った。

「もう、いいのか？」と、為男が落子の様子を見つつ訊く。

「もう大丈夫よ」と、冷子はにこにこ笑い、

「わたしは大丈夫じゃないです」と、落子はしくしく泣いている。すっかり元気を取り戻した色部冷子は、台所に向かうと無造作にエプロンを手に取った。

「何するの？」

「何、つて？夕飯の準備に決まってるじゃない

「あ、作ってくれるんだ」

急に空腹を思い出したよう」、おなかをさすりながら為男はうなずいた。

「今日はあたしが当番なのよ」と、冷子が説明し、

「明日はわたしです」と、落子が補足する。

「じゃ、ぼくの当番の日は……」と為男は確認しかけて、冷子の冷たい視線のシャワーを全身に浴びた。「……しなくて、いいのかな」冷子は相変わらずの態度だったが、目元にわずかに笑みを浮かべていた。

「思つてたキャラと違うわね、随分と」

「それは、どういうこと?」

冷子が答えないので、為男は視線を落子に向けたが、こちらも返事は無い。

「一人がぼくをどういうキャラだと思っていたのか、訊いてもいいかなあ」と、言いかけて、『設定』を思い出した為男は口調を改めた。「説明しろ。命令だ」

困ったような二人を見つめ、為男は付け足した。

「『台本』に書いてないことならいいんだろ? 会話とか、『設定』とかからはどうな性格が想像できたんだ? あくまでも、下僕としての『類推』の範囲内で、のことだよ」

「……言つてもいいの?」

「もちろんさ」

「そう、ね。『溢れんばかりの欲望に忠実。乱暴。我儘。下僕を家畜のように扱う人』」

「それはひどいなあ

「そして『絶倫』」

「ぜ、絶倫?」

しつこいようだけど、これって一般向けの話だよね。

と、色々な意味で興奮気味の為男の視線を受けて、落子が恥ずかしそうに答えた。

「あの、その、もし大人向けのエッチなお話でしたら、ここでその、

冷子ちゃんとのあれでこれでそれな展開も、きっと強制イベントなんだろう、と思いますです」

「ジ子にしては妙に説得力のある台詞だな、と為男は感心した。

「ちょっと期待してたのに、残念ね」

くふふつ、と笑うと、為男の反応を待たずして冷子は台所へと消えた。落子が手伝います、とあとを追い、為男の見えない所からジ子が居ると邪魔よ、とか、それはあんまりですしくしく、とか、そんな感じの会話が漏れ聞こえてくる。

為男は座つたまま脱力して、天井をあおいだ。

「なんだか、なあ……」

少々危惧していた夕食の味は割とまともで、といふか、『ご飯にレトルトのカレーをかけただけなので不味いわけも無いんだろうけど、それでもおながが一杯になると為男の体には一日分とは思えないほど疲労が重くのしかかってきた。

「い」ちそうさま

「おやまつさまでした」

「もう、寝てもいいかな……じゃない、寝ることにする」

「どうぞ、ご主人さま。あ、そうだわ。『強制』じゃないけど、一応、台本に載つてるから言つておくわね」

「何を?」

「ええと、『もうわたしは体力の限界ですう。お願ひですから、少し休ませて』」

溢れんばかりの色氣を出して言い終えると、

「じゃ、おやすみなさい」

と、冷子は食器を抱えてあつさり身を翻した。

スプーンを口にくわえたままの落子は、顔を真っ赤にしてうつむいていた。

為男は首をふりふり一階へと続く階段を上ると、ぐるり、と周囲

を見わたした。

一階には部屋が三つあって、その内の二つにはそれぞれ下僕の名前が付いたプレートが下がっている。為男は、何も付いてない部屋の扉を開けた。

机、椅子、本棚、クローゼット。そして、整えられたベッドがひとつ。

制服を脱ぎ捨てると、為男はそのままベッドの中に潜り込んだ。心も体もくたくただった為男は、五分ともたずに夢の世界へと飛び込んだ。

第三章 魔王は強かつた——（一）

朝。

聞こえるのはズズメの鳴き声。カーテン越しに降り注ぐのは春のうらりかな日差し。

それはいつそすがすがしい、とさえいえる朝だつたけれども、戸為男はまるで敵地に潜入したスペイのよう、目をぐるりぐるり、と動かして周囲を確認した。

「夢オチ、つていうことは、無いみたいだなあ……」

為男がぼやいたのも仕方がない。いつぞ昨日のあれが、コメやマボロシであつたなら。

いや、そもそもこの世界が夢や幻で、ぼくは本当は……。

と、そこまで考えて、為男はベッドの上にむづくりと起き上がった。

「ぼくは、本当は……なんだつたんだろう」「寝ぐせのついた頭に、Tシャツにパンツ一丁。そのままの姿で、為男は腕組みをしてしばし考え込んだ。

昨日は気がついたら教室に座つていて、当然のように『自分は戸為男である』と認識して、家に帰るまでにはそれではちがいない、と確信した。ところが、家の中では知らない事実ばかりを提示されてしまつたのだ。

『主人』、『下僕』、『魔王』、『四天王』、そして『台本』。

いつたい、どうしたものかな。

と、為男はうんうなつた。特に気になる最大の問題は、下僕を自称する女の子ふたりとの共同生活（今まさに進行中）である。外見はまあいいとしても、中身がかなりアレな感じの女の子ふたり

である。いや、アレなのは『台本』の『設定』のせいかもしないけど……。

不意に為男の部屋のドアがひらいて、「あら、もう起きてたの、ご主人さま」と、色部冷子が顔をのぞかせた。どうやら朝からシャワーを浴びたらしく、濡れた髪が白い肌にしつと張り付いている。「元気そうね」

「いや、そうでもないよ……」「でも、はちきれそうよ」

慌てて、為男は掛け布団で下半身を覆い隠した。

「これは生理現象だから」

意識しているのかしていないのか、冷子は濡れた髪をかきあげた。「朝『』はんの用意、もうすぐできるひじいわ」

「そうか、わかつたよ」

「ただし、今日の食事当番、ドジ子だから」

「……そうか、わかつたよ」

料理をドジつてないといいけどな、と祈りつつ、流石にこの格好のままだとな、と思つた為男は、起きた後でパジャマを着ると階下におひつた。

出迎えたのは、どこまでも元気のいい声。

「あ、ご主人、おはよっすー！」

「うん、おはよっ……」「

朝からテンションの高い逆井落子に弱々しく応えると、朝食ができるまでの間に為男はシャワーを浴びた。汗と汚れと心の涙とを洗い流すと、少しさつぱりとした気分になつた。

どちらが用意したのか分からぬが、脱衣所には新しい着替えが置いてある。

次からは、下着くらいは自分で用意しよう。
と、赤面しつつ制服を着た為男が居間に戻ると、満面の笑顔の落

子にむかえられた。

「朝ごはん、できますですよ」

「へへ、と笑った落子を見て、為男は自分の予想通りの光景に心の中で嘆息した。

逆井落子の指には、数箇所の絆創膏。

机の上の食器のあるのは、正体不明の物体。

それでも冷子がわざわざ椅子を引いてくれたので、やむなくそこに座らざるを得なくなってしまった。為男がちょっと逡巡した後、

「……これは？」と、おそれおそれ皿の上にあるものの正体を訊くと、

「ベーコンエッグですです」と、小さい胸を張つて落子が答えた。

一皿為男は、ベーコンエッグと称する物体を慎重に観察した。

まず、ベーコンが千切りである。そしてそれが卵と十分なほど混和されている。卵と思しき部分は焦げていて、全体が見事な濡れ落ち葉色を呈している。

更に皿を引くのは付け合せのサラダ。見事なまでのレタスの千切り。

普通、レタスは包丁で切らずに、手でちぎるんじゃないのかな。

と、為男は真剣に考えた。まるでとんかつの付け合せのキャベツのように、皿に山盛りにされても困るのだけれど。

それでも為男は、さあさあ、どうぞどうぞ、と皿をせりあわせながら勧めてくる落子を見て、仕方なしに口に運んだ。

抜群のかたさを持つパサパサの卵と、カリカリになりすぎたベーコン。自分が食べているのはドライタイプのキヤットフードかな、などと思いつつ、それでも落子の左手に火傷の跡まであるのを見て、為男は努力して口に運んだ。

冷子はベーコンエッグを一口で放棄すると、後は千切りレタスを無表情に口に運んでいる。そして落子は食パンをおもむろに手に取つたのだが……。

文明の利器バンザイ。

いくら「ジジ子」といえども、ボタンを押すだけのトースターは決して「うできるものではない。かくして、一番まともなのはトースト、とこの見事な朝食ができるがつた。

格闘の拳句にオレンジジュースで流し込んだ為男を、落子はじつと見つめていた。

「あの、やっぱりおしゃくなかったですか？」と、探るよつた声を出した落子に、

「いや、まあまあだつたよ」と、為男は笑つて応えた。

もつとも、冷子が容赦の無い態度を取つてるので、落子も状況を察していふだろう。少々気まずい感じの空気がただよつた後で、落子がしょんぼりと謝つた。

「あの、朝ごはんだけで手間取つてしまい、お弁当を作れませんでした……」

ここで為男は主人の寛容さを示し、下僕をいたわる言葉を与えた。「いや、購買部で色々買つのも楽しいから、別にお弁当はいらないよ」

「そう、ですか」

ちよつぴりほつとしながらも、どこか残念そうな落子を見て、為男も色々と安心した。

「どうせ今日はお弁当いらないでしょ」

意味不明の冷子のつぶやきを、為男は軽く流してしまった。

昨日初めて学校に居たくせに、行つたことも無い購買部の存在を承知していて、色々楽しい、とか言つている自分は何なのだろう、と考えていたからだつた。

『魔王の因天王の筆頭』といつても、一戸為男も所詮は高校生である。

朝食の後は登校することになるわけだが、ここで為男は少し迷つた。いくら電車通学とはいえ、三人でいるのを見られてもいいのか

な、と考えたからだ。

だが、冷子と落子が、

「下僕なんだから、同行して護衛するのは当然です」

と異口同音に言つのを聞いて、為男も仕方なくそれを認めた。正直な所、昨日は何も考えずに帰つてしまつたが、学校への道順に少なからず不安があつたというのも、ふたりの同行を認めた理由である。

乗り込んだ電車に揺られながら、為男は丁寧に周囲を観察した。周囲にいるのはスース姿のサラリーマンや、制服姿の学生たち。まあ、朝の電車内としては普通の光景だ。

でも『普通』といつのは何なのだろう。何をもつて『普通』とするのだろう。

と、為男の中に唐突に疑問が浮かんだ。

もしも、為男が全く違う異世界の住人だったら、この光景を『普通』ではない、と思ったかもしれないのだ。

車輪のついた鉄の箱が電気の力で人間を運ぶ、といつのは冷静に考えればおかしなものかもしれないし、或いは『人間』という存在自体ですら、本来は違和感を覚えるべきものなのかもしれないのだ。人間にあらざるもののがのしのしと歩き回つている世界や、機械の群れがほいほいとダンスを踊つている世界だつて、そりやあるだろうし。

自分が、この世界を『普通』だと考えている根拠は、いつたい何なのか。

行き先を見失いつつあつた為男の思考が停止したのは、落子が小さな手を顔の前で振つてみせたからだつた。ほぼ同じ構造を持つ制服を着た人（と思しき存在）たちと一緒に電車を降りると、為男は二人の下僕の後をのこのこと歩いて改札を出た。

忌まわしいことに、下車した駅から学校までの道順をしつかりと覚えていた一戸為男は、下駄箱で人と別れると自分の教室に向か

つた。昨日と同じ席に座ると、まつとうな生徒として過ぐし始める。もちろん、為男は真面目に授業など聞く気は無かった。何せ家中がアレなので、この教室内は一人で考えをまとめる「こと」のできる貴重な空間だ、と考えていたのだ。

まずは、為男自身がおかれている状況を整理するところから始めよし、と決意。

ここは『普通』の学校だよな。

と思つた為男はすぐに小さく舌打ちをした。何が『普通』とか考えるのは止めにしよう、と自分に約束する。『普通』の定義から考えるのは面倒くさいことこの上ないし、大体『魔王』や『四天王』がいる時点では、『普通』の学校でないのは明らかだった。

過去の記憶が無い上に、『台本』も持っていない一戸為男が存在することも十分異常なのかな、とも為男は考えた。もし、自分に中学校や小学校の記憶があつて、しかも両親や家族に関する記憶も十分に与えられていたとしたら、自分はどう考えただろうか。

下僕を自称するふたりの精神が異常である、という結論にたどりついたかもしれない。

と、苦笑したところで、為男は慄然とした。不意に、胸の奥に恐ろしい疑惑が首をもたげてきたからだ。

このぼくの状態そのものが、『台本』の作者の狙い通りなのではないだろうか？

もし過去の記憶があれば、為男は冷子と落子を異常者と決め付けて、下僕として受け容れなかつたかもしないのだ。あの一人を下僕として受け容れ易い精神状態にするべく、為男には不完全な情報しか与えられなかつたのだ、としたら。

いや、それは違う。

と、為男は首を振つた。

そもそも、為男に『台本』が与えられていないことこそがおかしいのであって、『台本』があれば、もつとすんなりとあのふたりを

受け容れられたのだ。もし自分に『台本』が『えられて』いれば、冷子を愛人として認めたのかな、などと考えている自分に気付き、為男は再び苦笑した。

為男だつて健全な青少年だから、色部冷子の制服の膨らみやその揺れ具合を思い出すと、甘酸っぱいものが下半身を中心としてこみ上げてしまつ。おまけに、それは為男の手の届く所にあるらしいのだ。為男さえその気になれば、あんなことやそんなこともできそうな感じである。加えて、もう一人の下僕、逆井落子も状況次第では色々できそうな雰囲気があった。落子は冷子と正反対のプロポーションだけど、あれはあれで……

危ない方向に行きかけた為男の思考が、唐突に外部から停止させられた。

「おい、一戸。一戸、為男」

「ごく自然に、為男は返事をして立ち上がつた。

「はい、何でしようか先生」

教師が、ちょっと嫌な感じの笑みを浮かべながら言つ。

「問四の答えは？」

為男はあまり数学が得意ではなかつたけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いてたのか。てっきり口を開けたまま寝てたのか、と思つたよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、為男は赤面して椅子に座つた。

何かへんだな、と小首を傾げながら。

第三章 魔王は強かつた——（2）

昼休み。

急に騒がしくなった教室内をぼんやりと眺めながら、一匁為男は不審を感じていた。

危ない妄想にそれほど時間を割いた覚えもないのだが、あつという間に午前の授業が終わってしまったからだ。それでも左手でおなかをさすりながら、朝の宣言通り購買部に行こうかな、と考えた為男の脳内に、急激かつ強力に『あるもの』が浮かび上がってきた。

昼休みに、いつもの場所に集合する。

気が付いた時、為男は席を蹴って立ち上がっていた。

そして、『いつもの場所』へと歩き出す。自分で驚くほど迷いのない足取り。

自分の意思によりず勝手に足が動くのを感じて、

強制イベント、か。

と、為男は直感した。まるで何かに引きずられるかのように足は力強く動き続け、『いつもの場所』が存在する旧校舎へと向かっていくのだ。

グラウンドへ出た時、為男は自分が独りではないことに気付いた。いつの間にか一人の一年生の女の子が、自分の三歩後ろをついてきている。振り向かなくともその正体に為男は気付いていた。

冷子と落子も、この強制イベントに参加するんだ。

そういえば朝方、冷子が弁当は要らない、とかなんとか言つていたな、などと為男が渋面で思い出している間に、足と体は旧校舎についていた。

為男が鉄製の重い扉を開け、カビとホコリの臭いが充满する旧校舎の中へと入りこみ、そのまま木製のきしむ廊下を歩いて、『いつ

もの場所』であるひとつ目の教室に入ったとき、そこには既に先客が居た。

居るのは男子生徒三人。上履きの色から、三人とも同じ一年生である、と分かつた。

一人目は、二メートル近い長身で丸刈りの男子生徒。

二人目は、背が低くてメガネをかけた神経質そうな男子生徒。

三人目は、中肉中背で何も特徴のない普通の男子生徒。

男子生徒三人に見つめられ、どうしようか迷つて居る一円為男を置き去りに、背後にいた色部冷子が「うやうやしい」とぞえこえる口調で申し立てた。

「」機嫌麗しゅう、ふたみわま、もえぐわわま、よつわわま

逆井落子も揃つてペコり、と頭を下げたのを見ると、今度は男子生徒たちが口を開いた。

「いちのくわまも、お元氣そうで何よりです」

「あ、ああ……まあ」

困惑しつつも、かるづじて手をかかげて応じた為男は、慌てて冷子の腕を肘でつついた。

「」この生徒たちは何なの？

やや青い顔をしている為男を一瞥した冷子は、無造作に言つた。

「苗字を考えれば分かるでしょ、四天王よ」

「……」

いちのくは一戸。

ふたみは一見。

さえぐわは三枝。

よつわは四谷。

酷いネーミングセンスだ。

と、為男は軽いめまいを覚えつつ、懸命に意識を保つて冷子に訊いた。

「ぼくはこの三人に対しても振舞つたらいいんだ？」

「あなた、四天王の筆頭なのよ？　この三人に対しては偉そうにしてればいいわ」

為男は頭を抱えたくなつた。主人としての立場もそうだが、偉そうにするのは為男の得意とする所ではないのだ。

だが、その苦悩も長い時間ではなかつた。廊下にやけに堅い靴音が響き渡り、為男がなんだなんだ、と思つてゐるうちに教室の扉が乱暴に開かれたのだ。

「おう、おめえら、揃つてんじゃねえか」

と、ぶつきら棒に入つてきた生徒を見て、為男は心底おどろいた。その生徒は、きょうびあらうことカリーゼントで、ソリまできつちりと入つていた。更に上着は短ランで、そしてズボンは普通のもの倍くらいの太さがある。いわゆる、ボンタンだ。

今時、こんな不良が絶滅しないで残つてたのか！

と、半ば感動さえ覚えた為男の視界が、急に一段低くなつた。誰かが何かしたわけではない。為男自身が、勝手にその場にひざまずいたのだ。

一戸為男は四天王で、しかもその筆頭である。

冷子の話を聞く限りでは、残りの四天王の三人にも偉そうにしているらしい。

とすると、このぼくがひざまずいたということは……。

「たしかメン合わせんのはこれが初めてだよな、ああ？　オレが『魔王』の王野悪人だ」

と、不良がいかつい声を出した。必死に衝撃に堪えている一戸為男を含めた四天王と下僕たちに、容赦の無い声が掛けられる。

「つていうかよ、オレ『台本』読んでねえんだよ。あんな字の多いの読んでられつかよ。せめてマンガにしろ、つて感じじゃね？」

と、王野悪人はひときわ下品な笑い声を上げたが、瞬時にそれを

おさめると、

「お前らも笑えよ」

と、冷たく言い放った。自分も含めてその場にいた全員がぎこちない笑い声を上げるのを聞いて、為男は絶望的な気分になつた。居並ぶ部下たちの反応にも構わず、やおら王野はポケットからくしを取り出すと、茶蓋のポマードをたっぷりと付け、それを髪にこつてりと付けると、さらにねつとりと撫で付けた。ギラギラ光る王野の髪から出た油の臭いが、教室内に充満していく。

「よし、上等だぜ。おめえら血口紹介しろ。オレがこきつかつてやるよ」

王野はタバコのヤード真つ茶色になつた歯を、猿のようむき出してみせた。

「弱い順に挨拶しなつ」

その声に震えながら立ち上がつたのは、為男と同じくらこの背丈の生徒。

「あ、ボ、ボクは四谷並夫です。四天王の、四番目です」

顔面蒼白で汗びっしょりの四谷に心から同情しつつも、為男は慎重に様子をうかがつた。

「おめえ、弱そうだな、ああ?」と、王野が声を荒げると、「す、すみません……」と、四谷は涙声を返した。

そんな四谷に容赦無い視線を向けていた王野は、毒蛇のような笑みを浮かべた。

「おうおめえ、ちょっと購買部つてパン買ってこ」

「え、ええ?」

「文句あんのかよ、上等だぜつ」

再び汚い歯をむきだした王野を見て、四谷はふりつく足取りで教室を出て行く。

「次は?」

やる氣の無い王野の声を受けて立ち上がつたのは、メガネの生徒。

「僕は三枝ばかり、四天王の三番目です」

「はかり？『はかり』って、どんな字書くんだよ、ああ？」

「それでもいよいよメガネを丁寧に中指で直すと、三枝は答えた。

「『謀』っていう字です。謀略の謀、ですよ。僕は名前の通り策謀や謀略が得意なんです。僕の頭脳を使って、色々とお役に立てるか、と思いますが」

三枝も歯をむき出してみせたのは、『魔王』たる王野へのゴマスリであったようだが、

「おめえみたいなヤツはよ、オレは一番嫌いだぜ」

と、笑いもせずに吐き捨てた王野を見て、自称謀略家は青い顔でひざまずいた。

直後に、指名もされていないのに長身の人物が立ち上がる。

「オッス！自分は一見肉雄、四天王の一番目っス！」

「おお、おめえ、でかいじやねえか」

と、王野に言われた一見は、突如として躊躇も見せず上着とシャツを脱ぎ始めた。何が始まるんだ、と思う間も無く、上半身裸になつた一見はポージングを決めた。

「オッス！自分は頭悪いので、この筋肉が全てっス！細かいことはできませんが、喧嘩だけは自信があるっス！」

隆々と盛り上がった筋肉を見て、王野は嬉しそうに下品な笑い声を上げる。

「おめえ、気に入つたぜ」

「オッス！ありがとうございまっス！」

狭い教室内だといふのに、旧校舎の外まで聞こえそうな大声を見は出した。

「じゃ、最後だな、ああ？」

為男は震える足を必死に動かして立ち上ると、言った。

「ぼくは一戸為男です。四天王の、その……筆頭です」

「ふうん。で、後ろのアマは？」

「は、はい？ああ、ええと……下僕の、色部冷子と逆井落子です」

王野はいやらしい視線を動かすと、とんでもないことを言っての

けた。

いいアマ連れてんじやねえか、オレに寄りせよ

「……は、はあ？」

魔王が汚い舌で唇を舐めるのを見て、為男の背中は総毛だった。

農業の発展の歴史が、亞洲、アフリカ、ヨーロッパの歴史と何處か似てゐる。

「申し訳ありませんが、そのような『設定』ではございません、王

野川

「おめえ、いい体してんじやねえか。オレのスケになれよ。楽しませてやるぜ」

魔王の禁言にも冷子は動じる気配はない。冷えだ声で幽する

驚いたことに、『小説』の一文字を聞いた庄野は一步

「くそ、なんで魔王のオレが独りで、手下のてめえがスケ連れてん

たよ ああ」

「ちっ、しかたねえな。ウソつたれめー

それを聞いた為男は内心で拍手喝采。

ないんだ！

お音が聞こえ

「あ、あの、とりあえず焼きそばパンとカレーパン買つきました」

蒼白を通り越して鉛色の顔をした四谷が顔を覗かせた

三

を奪い取る。

……あの、お金!?」

山谷の蚊が鳴ぐよ／＼な声を聞いて、田野に茶色い菌と黄色い花をむき出した。

「ああ？ なんか文句あんのかよ？」
「な、な、なんでもありません……」

四谷の反応を見て満足そうに笑うと、王野はそのまま外に出て行
「う」としたが、そこで三枝が出した慌てた声がストップをかけた。
「あ、あの、王野さま。たしか今日、我々はここで大事なご命令を
頂くはずですが」

「ああ？ …… そつか、『台本』にそんなこと書いてあつたかもな」
音高く舌打ちした王野は、面倒くさそうに口を開いた。

「ええと、あれだ。おめえら、学校に『勇者』とその一味がいやが
るんだ。やつらはオレの命を狙つてやがるらしい。やつらを探し
出してーーー」

王野が教室に居る全員を見渡す。

「ぶつ殺せ」

「ーーー、殺す？」

反射的に叫んだ為男は慌ただしく視線を動かしたが、残りの四天
王から帰ってきたのは

何驚いてるんだ、こいつ？ 当然のことだろ？

と、いう視線だった。

「そ、そんな……」

「てめえ、一戸とかいったな。オレに逆ひつのかよ

「い、いえ……」

「よしわかつたぜ、力の違い、つてやつを見せてやる。上等だぜつ
王野が口の端に薄笑いを浮かべたまま、為男にゆらゆらと近付い
てくる。反射的に歯を食いしばった為男にぶつけられたのは、拳で
はなく言葉だつた。

「てめえ、確かに妙な力があるはずだろ、ああ？」

「みょ、妙な？」

「使えよ、おい！」

混乱寸前の主人を見て、色部冷子が冷静な声を出した。

「（）主人さまは、キャラの『レベル』を見抜く能力をお持ちです

「の、能力？ ど、どうしたらいいんだ？」

「強く念じてください。相手のレベルを見たい、と」

迷いながらも、ええい、ままよ、とばかりに為男は強く念じた。その瞬間、まるで何かスイッチでも入ったかのように、為男の視界にフィルターのようなものが掛かつた。

あわわあわわ、と狼狽する為男の視界に見えたのは、教室に居る生徒たちの頭の上に浮かぶ数字だつた。

色部冷子の茶色がかつた髪が作り出す、綺麗なウェーブのすぐ上。

「『10』っていう数字が見えるけど、これが……」

「そう、それがあたしの『レベル』です。その状態になれば『能力』が発動して証拠。他の方々の『レベル』も見れるはずです」

為男は、視線をショートカットの女の子に向けた。

逆井落子 レベル 10

落子は冷子と同じレベルらしい。

覚悟を決めた為男は、教室の中をぐるり、と視線を動かす。

四谷並夫	レベル	35
三枝 謙	レベル	75
一見肉雄	レベル	150

これが、四天王の実力か。

頷いた為男に、無言のまま流れるような動作で冷子がコンパクトを取り出し、中の鏡を主人に示した。まだ昼だから、そこに映つたのは人間の姿。その頭の上には……

一戸為男 レベル 399

思つてたより、遙かに高いぞ！

それが、為男の正直な感想だった。単純に下僕のおよそ四十倍の力があることになる。為男の頬がわずかに緩んだが、それもつかの間だった。

鏡の中に、油ぎつたリーゼントが入り込んできたのだ。

「オレはいくつだよ、ああ？」

そこに見えた数字を見て、為男の頬は瞬時に引きつった。

「王野悪人……さま、レベルは999です」

「わかつたな」

息がかかるくらいの距離で、王野はいやらしく唇をねじ曲げた。

「……はい、王野さま」

ポマードとタバコの臭いの中、失神寸前の頭で為男は答えた。王野は色部冷子をなめまわすようにして眺めると、パンの紙袋を抱えたまま出て行く。

一戸為男は、残る三人の四天王が別れの挨拶をするのにも気付かないまま、ふらふらとした足取りでその場を離れた。

それから為男は、どうやって教室に戻ってきたのかよく覚えていない。

午後の授業が始まつたことも気付かず、為男は頭を抱え込んだ。考えたのは『魔王』の命令のことだけ。

王野が下した命令は、『勇者』の殺害、つまり人殺し。

『魔王』の力は圧倒的だ。ぼくたちは、ただ命令に従うしかないんだ。

たとえ『魔王』とその部下という『台本』上の『設定』が無かつたとしても、あんな王野みたいな奴に為男が抵抗できる、とは思えなかつた。為男は自分が置かれている状況を把握し、その恐怖に吹き出る汗が止まらなくなつた。

隣の席に座つている女子生徒が、為男を心配そうに見ている。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

小声で問われ、為男は同じような小さな声で答えた。

「大丈夫。何でもないよ、木村さん」

蒼白な顔で汗を拭つた為男は、その会話の異常さに気付かず、自分を抑えることに専念した。

落ち着け、落ち着くんだ、一戸為男。

そもそも高校に『魔王』や『勇者』が居ること自体がおかしいのだ。当然、『四天王』なんものが居ることもおかしい。更に人間に『レベル』があるのだっておかしい。

こんなおかしな世界では、『殺す』というのも何か別の意味があるのかもしれないし、もしかしたら何か抜け道もあるのかもしれないのだ。案外、お金を払えば教会やお寺で死人を生き返らせることだってできるかもしれないんだぞ、と為男は自分に言い聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001y/>

導師オッショード台本

2011年11月9日19時06分発行